源信の往生要集は地獄と極樂界との對照對比であつたが、それが鎌倉時代に至つては鬼神と人生との比重に一轉したことを思ふべきである。そこに愚管鈔の日本語觀また實朝の復古的詩的實感をみとむることができ、それをまた源信に溯つて「日本國はまことに如來の金言たりといへども、たゞ假字もて書き擧るべきなり」といふごときにその思想的批判基準を察せしむるのである。

これらの思想史的生命は史學者によつて或は淨土教と名けられ、現實主義または民衆主義、復古主義とやうにさまゞに形容さるゝのである。それらの史觀の根元は吾等のまのあたり仰ぎ奉つた明治大帝の御思想であつたのである。

絶えたりとおもふ道にもいつしかとしをりする人あらはれにけり

萬代にうごかぬものはいにしへの聖のみよのおきてなりけり

葦原のみづほの國の萬代もみだれぬ道は神ぞひらきし

かく御製を捧讀しするときは日本は一大家庭的同朋との實感をよびめさましめらるゝ。「この道理の道を劫初より劫まへあゆみくだり、劫まより劫初へあゆみのぼる也」（愚管鈔）といふこともこの一大家庭的同朋の思想史的感激である。「つらなりながら時となり」といつた道元禪師の個人的經驗と「いつしかと、しをりする人」と頂かしめます大御言葉とはひとしき史的生活內容である。（二、二三）

三階教に關する隋唐の古碑（補遺）

神田喜一郎

予は昨年本誌に「三階教に關する隋唐の古碑」なる一文を掲載せしが、當時匆率の間に稿を成せしを以て、今にして之を見れば補正を要すべき個所頗る多し。然るに予は其後支那に游び、天津に舊識の間なる羅振玉先生を訪問せしに、先生は近く刊行になりし先生の文集永豐鄉人稿を贈られたるが、歸朝後之を翻閱するに及び、其の雪堂金石文字跋尾に端らずも予が曩に本誌に紹介せし三階教に關する隋唐の古碑の二三に就きて先生の考證のあることを發見したり。卽ち同書卷四に收められたる。

菩禪師塔銘跋
隋信行禪師興敎碑宋拓本跋
法藏禪師塔銘跋
道安禪師塔記跋

の四篇是なり。但だこの中隋信行禪師興敎碑宋拓本跋を除きたる他の三篇の文は先生の舊著讀碑小箋に見えたる所と全く同一なりしを以て稍失望したるが、隋信行禪師興敎碑宋拓本跋に至りては予は始めて之を寓目するを得たり。其所謂隋信行禪師興敎碑宋拓本とは予が本誌前々號に紹介したる所のものにて、羅振玉先生の跋文には予の未だ言ひ及ばざりし點を指摘したれば次に羅先生の全文を錄して予が前稿の補正に代ふべし

此碑唐越王貞撰。薛稷書。金石集古兩錄均箸錄。金石略寶刻類編寶刻叢編亦載之。不知何時佚去。本朝金石家無言及者。此道州何氏藏宋拓文。文已不全。殆缺下半。中間亦缺十餘行。據金石略。言此碑有陰此又缺碑陰也。諸家著錄云。碑立於神龍二年八月。此本不可見。金石錄又載信行禪師碑。越王撰。張廷珪八分書。寶刻叢編又有開皇十四年信行禪師傳法碑。僧法琳撰。然則信行在隋唐間。昔有三碑。此其一焉耳。

こゝに寶刻叢編に見えたりといふ開皇十四年信行禪師傳法碑は、予の前に全く氣付かざりしものなり。而

してそは予が信行禪師舍利塔碑として掲げたるものと別なるが如くなれば遺忘したるものなるを、今又羅先生の文を藉りて予が遺漏を補ひ得たるは幸なり。但だ羅先生の文中、信行禪師興敎碑に關し淸朝金石家が全く言及する所なかりしと記せるは、稍當らざるの感あり、魏錫曾の續語堂碑錄に已に之を注意せるは予の前稿に述べ遺きたるが如し。

因みに昨秋龍谷大學が敦煌出土と稱する古經卷數種を購ひたる中、偶然從來未だ知られざりし三階敎の佚書ありしが、近日友人高雄義羅先生が隋唐間に信行の碑三ありと言へるは四ありと訂正せざるべからず。羅先生は予の擧げし信行禪師全利塔碑を未だ知られざりしが如し。然れども三階敎に關する隋唐の古碑として予が前稿に擧げし以外に、更に信行禪師傳法碑なるもの、存在せしことを今羅先生によりて敎へられたるは感謝せざるべからざるなり。又羅先生の文中金不錄を引いて趙王貞撰張廷珪八分書なる信行禪師を擧げたるがこは予の前稿を草せし時一時注意するを堅若は之が考證を發表する由なり。更に又聞く所によれば京都の某寺よりも近時三階敎に關する古本の發見せられしと云ふ。若し然らば從來殆ど不明ことせられし三階敎理の闡明せらるゝも當に近きにあるべし。予は刮目して之を待たんとす。

岡敎邃氏譯

梵文和譯法華經

梵語佛典の飜譯が、例ひ正しくは印度所傳の梵莢によるとゝ、その原型の變へらるゝと比較的少き遠き時代に不惜身命の求道心と、異國語に對する豐膽なる熟達力とを以て飜譯せられ從つて其當時の原型に於て規定せられたる漢藏譯等の諸佛典と、又同じく古き時代に於て原本のまゝ異域に流傳し、傳寫されたるものゝ今日發掘せらるゝ古き零本、斷片等とによりて嚴密に比較對校して、古典の原型に妥當的なるものにまで到達する道を通過せないものならば、又例ひ少しくその根基の上に立つものであつても、その飜譯以前のテキストロジーに少しでも嚴密性を缺如するが如きものならば其價値たるや單に派生的であり、學徒の片手間に漢譯佛典の苟に延書せられた所謂「國譯大藏經」と、價値に於て何れが優れるであらうか。

南條・泉兩先生が、ケルン・南條本によりて「新譯法華經」を出されてから早くも十年を經過し、其間我日本に於ける佛敎學の進步、殊に印度諸原語學が長足の進步を遂げたることは近時相續いて刊行せらるゝ出版物の上に著るしく見らるゝ所であるが、正に此當時に當り、日蓮宗の學匠岡氏によりて、自宗所依の根本聖典たる本經が譯者半生の努力によりて譯せられたことは誠に佛敎學界の慶事たらねばならぬ。其原典は固りケルン・南條本にも由られたことであらうが、特に河口慧海氏將來の優秀なりと稱せらるゝ印度古貝葉原本に依り、殊に斯界の畏敬すべき先輩、高楠・荻原兩博士の嚴正緻密の證義と、將又西藏語大學匠河口慧海氏の西藏譯對校の補削とによりて、實に渡邊海旭氏序の讃嘆措く能はざるものあるのであるから、是れ誠に吾人の期待して止まない眞の意味に於ける梵文和譯法華經たらねばならない。

その譯文について見るも、ビュルヌフ、ケルンの諸先輩すら其飜譯に際し尙且夥多の難點を殘したる梵文偈頌の、pada の長短種々なるものを一樣になだからかな七五調に譯出せられたなど到底容易な業でない。而も